

『風葉和歌集』における人物呼称

宮崎, 裕子
九州産業大学国際文化学部 : 講師

<https://doi.org/10.15017/26947>

出版情報 : 語文研究. 113, pp.27-39, 2012-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



『風葉和歌集』における人物呼称

宮 崎 裕 子

一

鎌倉時代に編纂された物語和歌集『風葉和歌集』に記載された作中人物名、特に詠者名は、その人物の、物語における最終的な地位や立場に基づく呼称である、と考えられてきた。

『風葉和歌集』を資料とした散逸物語研究の先駆者である松尾聰氏が、

読人名は一切、その人が物語に於いて到達した最後の身分名を以て称する事になつてゐる。

(『平安時代物語の研究』東宝書房、一九五五年)
と指摘されたように、官職を得ていた登場人物名のほとんど

が、その人物が作品中で到達した最終的な地位をもって示されている。

しかしながら、『風葉和歌集』に用いられている作中人物の呼称と当該人物の最終的な身分とが一致しない例も、僅かではあるが見受けられ、双方が常に一致しているとは限らない。

そこで、本稿では、『風葉和歌集』に歌が採録された二百余編の内、現存する一五作品について、詠者名および詞書中の呼称が物語最末における当該人物の地位や立場と一致するかを検証し、『風葉和歌集』の編纂者が作中人物の呼称を定める際の選定基準を明らかにすることを試みた。

なお、末尾を欠く作品(『夜の寝覚』『浅茅が露』など)、現存本に含まれない歌については、検証の対象外とした。作中

人物の呼称として抽出するのは、各作品の中で固有名詞的に使用され、特定の人物を指すと認められるものに限定し、「吉野に住み侍りける人(四二〇番歌)などは除外した。

「尚侍」と「内侍のかみ」、「大臣」と「おほいまうち君」、「匂兵部卿の宮」と「匂ふ兵部卿の宮」など、漢字・平仮名表記の違いや助詞の有無については、その相違を取りあげず、同一の語として扱った。

また、人物呼称一覧表の作成に際しては、官職名などはすべて漢字表記に統一した。一例を挙げると、「おほきおほいまうち君」は「太政大臣」と表記している。

二

まず、最も用例数が多い『源氏物語』の中から、詠歌が採録された、もしくは詞書に名前が挙げられた総計六〇名の登場人物について、詠者名と詞書中の呼称の用例とその数を表に整理した。^(注1)

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
惟光	右衛門督(夕霧息)	宰相中将(夕霧息)	薫	柏木	髭黒	右大臣(弘徽殿大后の父)	紅梅	頭中将	夕霧	匂宮	八の宮	螢兵部卿宮	今上帝	冷泉院	朱雀院	桐壺院	光源氏	作中人物	
参議惟光	右衛門督	宰相中将	薫大将	柏木の権大納言	髭黒の右大臣	二条の太政大臣	紅梅右大臣	致仕の太政大臣	夕霧の左大臣	匂兵部卿の宮	八の宮	螢の兵部卿の宮	みかど	冷泉院	朱雀院	賢木の院	六条院	詠者名	
1	1	1	15	2	1	1	1	3	10	13	1	3	1	3	1	2	1	40	用例数
			薫大将	柏木の権大納言	髭黒の関白	右の大臣	太政大臣	致仕の大臣	夕霧の左大臣	兵部卿の宮	宇治の八の宮	八の宮		冷泉院	朱雀院	故院	賢木の院	六条院	詞書中の呼称
			3	6	2	1	1	2	1	4	1	5	1	3	1	2	1	18	用例数

19 右近將監は、光源氏の失脚に伴い、官爵を剥奪されて須磨に随行した人物である。光源氏の復権後、頼負(衛門)尉となり、従五位下に叙せられた旨が松風巻に記されている。

前表の用例から、『風葉和歌集』が『源氏物語』の登場人物名を記載する際に採った選定基準について、以下のことが判明した。

①男性は、原則として、最終的な職位名を呼称に用いる。(1) 23)

9 夕霧は、「右大臣(一一一三番歌)」「左大将(一一一八番歌)」とも呼ばれている。

野分しける日、女のもとに遣はしける

夕霧の右大臣

1113 風騒ぎむら雲まよふ夕べにも忘るるまなく忘れぬ君

(巻第十五 恋五)

柏木の権大納言の住み侍りける所を、物より

まうでけるついでに見入れければ、月のみ遣

水の面をあらはに澄ましたりけるに

夕霧の左大将

1218 見し人のかけすみ果てぬ池水に独り宿守る秋の夜の月
(巻第十六 雑一)

一一一三番歌は野分巻で雲居雁に贈ったもので、この時期の夕霧は「中将」であり、一一一八番歌を詠んだ夕霧巻の時点では、実際に「左大将」の地位にあった。したがって、一一一八番歌の詠者名に関しては、意図的にかどうかはともかくとして、詠歌時点の官職名を用いたのだとも考えられる。

しかし、「右大臣」も「左大将」も、「左大臣」の誤写である可能性があり、この二例をもつて、「詠者名は物語中の最終官職名を用いる」という原則を否定する材料とすることは難しい。

13 髭黒は最終官職が「太政大臣」であるにもかかわらず、詠者名が「右大臣(一一五四番歌)」となっている。

雪の降りける夜、心にもあらずまからずなり

にける女のもとに、あしたに遣はしける

源氏の髭黒の右大臣

1154 心さへ空に乱れし雪もよにひとり冴えつる方敷きの袖

これは、北の方から香炉の灰を投げつけられて六条院へ出

かけられなくなった髭黒が玉鬘に贈ったもので、この歌を詠んだ真木柱巻における髭黒の官職は「右大将」である。

また、詞書中では「関白（五六番歌・一一九番歌）」と呼ばれているが、『源氏物語』本文では、髭黒に関して「関白」の語が使用されることがない。今上帝の叔父にあたる髭黒が左大将から右大臣に昇進し、「世中のまつりごと仕うまつり給ける（新日本古典文学大系③319頁）」ようになった、という若菜下巻の記述から、「関白」になったものと見なしたのだろうか。

②内親王は、未婚既婚にかかわらず、内親王という身分を示す名で呼ぶ。（24～27）

ただし、国母として女院となった28藤壺は、内親王より格上の「女院」と呼ばれる。

③后妃は、后妃としての身分・立場を示す名で呼ぶ。（29～34）

④女官は最終官職名で呼ぶ。（35～41）

内親王と同様、女官も既婚未婚にかかわらず官職名で呼ばれている。

なお、詠者名ではないが、41朝顔姫君にも、「桃園式部卿宮の娘」ではなく、「朝顔の斎院（八四二番歌詞書）」という公職名を用いている。

⑤女房は女房名で呼ばれる。（42～45）

女房名で呼ばれる42～45の中で、父親の官職名が明らかなのは、宇治の八の宮家に仕えていた45弁の君のみである。彼女の父は左中弁であったが、『風葉和歌集』の詞書では「左中弁の娘」ではなく、女房名を反映した「弁の尼」と呼ばれている。これが唯一の例ではあるが、公職に就く女官のみならず、私的な女房勤めをしている女性の呼称にも、親族との続柄ではなく、職名が優先されることの証左となるであろう。

⑥官職などを得ていない女性は、親族との続柄を示す名で呼ばれる。（46～52）

46「桐壺の更衣の母」や47「按察大納言の北の方」のように、誰かの親や妻などであることに基づいた名称を用いられている。

また、ともに太政大臣に昇った人物の娘である48雲居雁と49真木柱が、それぞれ「致仕の大臣の娘」「紅梅右大臣の北の方」と称されているので、『風葉和歌集』の詠者名および詞書

中の人物呼称は、その女性が未婚であるか既婚であるかによつて左右されるものではないようだ。

⑦当該女性を指す固有名詞として、物語中で用いられた、もしくは読者から命名された名で呼ぶ。(46～60)

⑥のような、誰かの妻や娘であることを示す呼称ではなく、53紫の上や55花散里のように、当該人物に対して、登場する巻名などに関連して名付けられた固有名詞を呼称として用いる例が見える。

したがって、『源氏物語』に登場する女性に関しては、最終的な地位がすべての詠者名に反映しているとは言いがたい。

⑧詞書中の呼称には、詠歌当時の地位や立場が反映される場合もある。(34・39)

34秋好中宮は、賢木巻で詠まれた三二一番歌・一一二一番歌の詞書の中で「斎宮」と呼ばれ、39藤典侍は、少女巻において夕霧が彼女に贈った四一〇番歌・四七七番歌の詞書で「五節の舞姫」と呼ばれており、どちらも詠歌当時の地位や立場による呼称である。

⑨辞任の有無が呼称に示されるとは限らない。(10・36・41)
娘に職を譲った36玉鬘を「尚侍」、斎院を退下した41朝顔姫君を「斎院」と呼び、官職を返上した10頭中将に対して「致仕の太政大臣」と「太政大臣」とを併用していることから、物語の途中で職を辞しても、必ずしも、かつてその地位にあったことを意味する「前〇〇」「致仕の〇〇」とされるわけではないことがうかがえる。

朝顔姫君の「斎院(八四二番歌)」、頭中将の「太政大臣(六九一番歌)」は詞書中の呼称であるが、八四二番歌は父桃園式部卿官の死去に伴つて斎院を退いた朝顔姫君に光源氏が詠みかけたものであり、六九一番歌は、頭中将が「太政大臣」ではなく「内大臣」の地位にあつた藤裏葉巻で夕霧が詠んだものである。いずれも、詠歌当時の地位や立場を反映した⑧の例とは異なり、物語中で辞任したことが呼称に採り入れられなかった例である。

三

次表には、『源氏物語』に次いで用例数が多い『うつほ物語』の中から、詠歌が採録された、もしくは詞書に名前が挙げられた総計五五名の登場人物について、詠者名と詞書中の

呼称の用例とその数とをまとめた。

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
今上帝	彈正尹宮(朱雀院の三の宮)	朱雀院	式部卿宮	兵部卿宮	嵯峨院	中務宮	良岑行平	良岑行政	源仲頼	源忠経	忠こそ	橘千蔭	源祐澄	源仲澄	源忠澄	源正頼	藤原兼雅の父	藤原兼雅	藤原仲忠	清原俊蔭	作中人物
帝	彈正尹親王	朱雀院	兵部卿の宮	嵯峨の院	中務卿の宮	中務卿親王	参議良岑行平	参議良岑行正	右少将仲頼		真言院の僧都	橘右大臣	参議祐澄	侍從仲澄	権中納言忠澄	右の大臣	左大臣	右大臣	右大将仲忠		詠者名
4	1	3		2	1	1	2	2	1	4	1	3	2	5	1	1	1	3	10		用例数
		朱雀院	式部卿の宮	嵯峨の院				宰相中将行正	少将仲頼	右少将仲頼	左の大臣	橘右大臣				左大臣	右大臣	右大将仲忠	贈中納言俊蔭	詞書中の呼称	
		1	1	1				1	2	1	1	3				6	5	5	1		用例数

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	
は別人)	俊蔭女	あて宮	仁寿殿女御	嵯峨院の太后	一の宮 (朱雀院)女	嵯峨院の女三の宮	大宮(正頼室)	清原松方	在原時蔭	宮内卿兼覽	藤原季英	紀伊權守	紀伊守	滋野和政	侍從惟風	中納言行忠	藤原直雅	平正明	源実忠	源実頼	源実正	源季明	源涼	作中人物
尚侍の督の殿	尚侍	藤壺の女御	仁寿殿の女御		嵯峨院の女三の宮	嵯峨院の女一の宮	清原松方	在原時蔭	宮内卿兼覽	右大弁季英	紀伊權守	紀伊權守	左少将和政	侍從是風	中納言行忠	藤宰相	中納言正明	中納言実忠	参議実頼	民部実正	源太政大臣	中納言	中納言涼	詠者名
1	3	5	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6	2	1	3	1	2	用例数
さきの内侍の督	尚侍	女御	藤壺の女御	嵯峨の院の後の宮	女一の宮	嵯峨院の女一の宮	時蔭					前紀伊守					中納言実忠				左の大臣	涼の卿	中納言涼	詞書中の呼称
1	2	1	9	6	3	1	1	1				1					1				1	1	3	用例数

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
46	仲頼の妹	朱雀院の女一宮の 按察	1		
47	孫王の君	孫王の君	1		
48	故式部卿宮の中 君	式部卿の宮の中の 君	1		
49	橘千蔭の妹	橘右大臣の妹	2		
50	修理大夫忠保女 (仲頼の妻)	修理大夫忠保女	1		
51	中務卿宮の北の 方(正頼の娘)	中務卿の宮の北の 方	1		
52	中納言実忠の北 の方	中納言実忠の北の 方	1		
53	一条の北の方	左大臣(源忠経) の北の方	3		
54	紀伊守種松妻 (源恒有の娘)	紀伊守種松が(の) 女	3	犬宮	
55	犬宮				3

前表の用例から、『風葉和歌集』が『うつほ物語』の登場人物名を記載する際に採った選定基準は、『源氏物語』に対する基準①～⑦と同様のものであったことが判る。『うつほ物語』に登場する男性は、皇族以外はほとんどが本名を明記されているため、男性の呼称には「最終官職+名前」という形式のものが多く見受けられる。

12 源仲頼は、出家して『うつほ物語』の中では「入道の君」と呼ばれるようになっていたが、『風葉和歌集』は詠者名にも詞書中の呼称にも在俗中の最終官職名である「右少将仲頼」

を用いており、官職を返上したことが必ずしも呼称に反映されない、という点も『源氏物語』に対する基準と同じである。ただし、「左近将監」であった36在原時蔭、「雅楽権頭」であった37清原松方は、姓名が記されるのみで官職名の記載がない。

「北の方」と呼ばれるのは正妻のみ。源兼雅の妾妻である48故式部卿宮の中君や49橘千蔭の妹などは、「北の方」と呼ばれない。

50修理大夫忠保女は、源仲頼の正妻であったが、あて宮への叶わぬ恋に絶望して世を捨てた仲頼から離縁されているので、「仲頼の北の方」とは呼ばれなかったものと考えられる。夫のあて宮への求婚が原因で夫婦仲が破綻したという点では、52中納言実忠の北の方も同様であるが、彼女の場合は後に夫と復縁しているため、「北の方」と呼ばれるのだろう。

また、53一条の北の方は、夫であった左大臣源忠経の死後、強引に千蔭に言い寄り、自邸へ通わせていたが、彼女の詠者名は「左大臣の北の方」であり、右大臣千蔭の「北の方」とは呼ばれていない。一条の北の方と千蔭との関係が正式な婚姻ではないため、彼女を源忠経の未亡人と見なしたのであるうか。

詞書中の呼称については、詠歌当時の地位や立場を反映さ

せた例は見当たらない。太政大臣にまで成り昇った23源季明を、六八五番歌の詞書では「左の大臣」と呼んでいるが、この歌が詠まれたのは国譲上巻で、この時すでに季明は太政大臣であり、何をもって左大臣としたのか不明である。

四

ここでは、前に取り挙げた『源氏物語』『うつほ物語』以外の一三作品について、各作品から採録された用例を表にまとめた。

1 『竹取物語』

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	かくや姫	かくや姫	2		
2	帝			帝	1
3	石上中納言			石上の中納言	1

2 『落窪物語』

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	中宮	中宮	1		
2	四の君	大納言忠頼の四の君			
3	源忠頼			大納言忠頼	6

3 『住吉物語』

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	男君	関白	1	関白	1
2	按察大納言			大納言	1
3	女君（主人公）	関白の北の方	4		
4	三の君	按察大納言の三の君	1		
5	住吉の尼君	尼	1		

4 『堤中納言物語』（花桜折る中将・ほとほとどの懸想・貝合）

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	中将	中将	1		
2	侍従	式部卿の宮の姫君の侍従	1		
3	藏人少将	藏人少将	1		

5 『狭衣物語』

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	狭衣	帝	30	帝	7
2	堀川院			堀川院	2
3	嵯峨院	嵯峨の院	1	嵯峨の院	1
4	後一条院	後一条院	1		
5	宰相中将	宰相中将	1		
6	一品の宮			一条院の一品の宮	2
7	嵯峨院女一の宮			一条院の中宮	1
8	女二の宮	嵯峨院の女二の宮	3	女二の宮	5
9	嵯峨院の皇太后宮			嵯峨の院の皇太后宮	1
10	（狭衣帝の）中宮	中宮	1		

11	源氏の宮	齋院	3	齋院	4
12	女別当	齋院の女別当	1	源氏の宮	1
13	(小)宰相	中務卿の宮の家の小宰相	1		
14	飛鳥井姫君	飛鳥井	7	飛鳥井	4

齋院であつた11源氏の宮を詞書中で「源氏の宮」と呼ぶ四四八番歌は、彼女を齋院に任じるところの賀茂の神からの託宣であり、詠歌当時の立場が反映された例である。

6 『浜松中納言物語』

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	中納言	中納言	11	中納言	7
2	帝	帝	1	内	1
3	東宮	東宮	1	一の大臣	1
4	唐の一の大臣				
5	唐の宰相	もろこしの宰相	1	河陽県の後	1
6	河陽県后	河陽県の後	1	河陽県の後	1
7	女王の君			河陽県の後	1
8	左大将の大君	左大将の娘	1		
9	吉野姫君	帥宮の中宮	2		
10	大式女	帥の宮の中の君	1		
11	唐の大臣の五の君	唐土の大臣の五の君	1		
		一の大臣の五の君	1		

7 『松浦宮物語』

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	橘氏忠	参議氏忠	8	参議氏忠	3
2	橘冬明	大将冬明	1	宰相	1
3	安倍関丸	参議安倍関丸	1		
4	明日香皇女	明日香の皇女	2	明日香の皇女	1
5	神奈備皇女	神奈備の皇女	1	神奈備の皇女	1
6	華陽公主	華陽公主	2	華陽公主	1
7	鄧皇后	もろこしの后	1		

8 『今とりかへばや』

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	男君	中宮	3	関白	1
2	女君				
3	四の君	太政大臣の四の君	1		
4	吉野の中君	吉野の宮の中君	1		

9 『在明の別』

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	院	院	1	院	1
2	今上帝	帝	2		
3	太政大臣			入道前関白太政大臣	2
4	東宮	東宮	1	東宮	1
5	関白	関白	1		

11	天女	天つ乙女	1	
10	中務卿宮の北の方	中務卿の宮の北の方	2	
9	中宮			中宮
8	主人公	女院	4	女院
7	内大臣	内大臣	1	内大臣
6	左大臣	左大臣	3	

10 『いはづのぶ』

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	嵯峨院	嵯峨の院	3		
2	入道式部卿宮			父宮	1
3	関白	関白	5	関白	1
4	内大臣	一条院の内大臣	5	一条院の内大臣	3
5	右大将	右大将	1	右大将	1
6	権中納言	左衛門督	2		
7	一品宮	女院	3		
8	女四の宮	女四の宮	1		
9	前斎院			前斎院	1
10	白河院の皇后宮	白河院の御息所		白河院の皇后宮	
11	宮の君		1		
12	伏見大君	皇后宮	3	皇后宮	2
13	中宮			中宮	1
14	中宮の中納言			中宮の中納言	1

6 権中納言は、「いまはごん中なごんときこゆる（鎌倉時代物語集成②359頁）」という記述があるにもかかわらず、詠者名

が前職の「左衛門督」のままとなっている。

11 『吾の衣』

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	苔衣の大將	右大将	1		
2	一品宮	一品の宮	1		

12 『我身にたどる姫君』

	作中人物	詠者名	用例数	詞書中の呼称	用例数
1	関白	関白	2	関白	1
2	宮の右大将	宮の大將	1		
3	女三の宮	水尾院の女三の宮	1		
4	音羽尼君	中納言の北の方	1		

2 宮の右大将は巻七で、

右大将、右大臣に、左大将、左大臣になりたまひぬ。

（桜楓社刊『我身にたどる姫君』⑥54頁）

と、右大臣への昇進が語られ、以降は「右の大臣」と呼ばれている。

しかし、同時期に昇進した左大臣は左大将も兼任しており、宮の大將についても、右大将と右大臣とを兼任していると判断して、「右大将」を詠者名に採ったのであろうか。

13 『むぐらの宿』

1	作中人物	1	用例数	詞書中の呼称	用例数
大将		大将			

五

末尾が現存する一五作品に限定した検証ではあるが、以上の事例から、『風葉和歌集』が作中人物の呼称を定める際に設定した選定基準は、おおよそ次のようなものであることが判明した。

- 一 男性に対しては、原則として最終的な職位を呼称に用いるが、若干の例外も見える。
- 二 内親王は、院号を得た場合を除き、「内親王」という身分を示す名で呼ぶ。
- 三 后妃は、后妃としての身分・立場を示す名で呼ぶ。
- 四 齋院や女官などの公職に就いていた女性は、その職名で呼ぶ。
- 五 女房仕えをする女性は、女房名で呼ばれる。
- 六 固有名詞が付与されている場合は、その名で呼ぶ。
- 七 二く六に該当しない女性は、親族との続柄を示す名で

呼ばれる。ただし、「北の方」と呼ばれるのは正妻のみ。

八 詞書中には、詠歌当時の地位や立場に関連した呼称が用いられる場合もある。

九 物語の途中で職を辞したことが呼称に反映されるとは限らない。

「七」については、夕霧の正妻である48雲居雁が「致仕の大臣の娘」、大宰帥と結婚した『落窪物語』の2四の君が「大納言忠頼の四の君」、宮宰相と結婚した『今とりかへばや』の4吉野の中君が「吉野の宮の中の君」とされており、誰かと正式な婚姻関係を結んでいる女性でも「〇〇の北の方」と呼ばれるとは限らず、呼称を決定する基準が一定していない。

かつて筆者は、『風葉和歌集』に数首の歌が採録された散逸物語『相住み苦しき』『すまひ(相撲)』を取り上げ、「源大納言の三の君」や「土佐守女」と呼ばれる女性は物語が終幕を迎える時点には独身であった、という前提に基づいて復原を試みたことがある。今となっては、その前提自体が不確かなものであったと認めざるを得ない。

このように、公職などに就いていない女性の呼称に関して選定基準に曖昧さがあるものの、『風葉和歌集』の編纂者

は、各作品の登場人物の呼称を定めるにあたって、原則として「当該人物が最終的に到達した職位」に関連づけた名称を採用していたことがうかがえ、従来の見解は妥当なものであったといえよう。

注

注1 『風葉和歌集』の引用は岩波文庫『王朝物語秀歌選上・下』に拠り、私に表記を一部改めた。

注2 岩波文庫(注1)では、二二八番歌の「左大将」を「左大臣」の誤写として、本文を校訂している。

(みやざき ゆうこ・九州産業大学国際文化学部講師)